

光星高野球部3年生コーチ後村さん

勝利へサポート任せて

小6時肘の障害で選手断念、強豪中学で裏方転身

阪神甲子園球場での全国高校野球選手権大会で12日、初戦を突破した八戸学院光星。三塁側スタンドからは声がかかるほどの声援が送られ、会場は沸きに沸いた。その中には、選手ではなく、学生コーチとしてナインをサポートしてきた八戸市出身の3年後村拳心さん(17)の姿も。試合後はチームの勝利を喜びながら、「次もベストを尽くしてほしい」と熱いエールを送った。

(千葉達也、福田駿)

後村さんは、父貴彦さん(52)の転勤などに伴い、小学3年の時に青森市の小学校に転校。2人の兄の影響でサッカーに打ち込んでいたが、転校先の友人に誘われて4年生から野球を始めるように。すぐに競技のとりこになった。

しかし、生まれつきの右肘滑膜炎の障害があった後村さんは、競技をする中で肘に痛みが生じるように。手術を行うも失敗に終わり、ボールを投げることができなくなってしまう。

選手としてプレーできたのは、わずか10カ月ほど。当時はひとくち落ち込み、「野球はやめよう」とも考えた。それでも、貴彦さんと今後について話し合うなど、「どんな形でもいいので大好きな野球に携われればいい」と気持ちをリセット。小学6年にしてサポート役に回ることを決

ノック、相手分析 献身的に



スタンドからナインに声援を送る後村拳心さん（中央）  
=12日、甲子園球場

心した。「野球をやるならレベルが高い所でやりたい」と、中学校は強豪・仙台育英学園秀光(宮城)に進学。宮城北部リトルシニア時代を含めて3年間、マネジャーとして裏方の経験を積んだ。

高校は、貴彦さんがコーチを務めていたことがある光星へ。これまで、指導者と選手の間に入ってチームを献身的に支えてきた。12日は、ひときわ大きな声を出して応援していた後村さん。「下手くそなノックを、文句も言わずに受けてくれた」という新城雄麻選手や砂子田陽士選手らが、堅い守りを披露すると、「僕のおかげだとは思っていないけれど、良いプレーを見せてくれてうれしい」と思わず笑顔に。勝利の瞬間は誇らしげな表情で大きな拍手を送っていた。

相手投手の分析などを行う「データ班」の一人でもある後村さん。3回戦に向けては「少しでもいいので貢献できればうれしい」と意気込んでいた。